

第1章 戦場

軍隊の生活 (特攻隊) ① 人間魚雷搭乗員は、きのこ雲を見た

わたなべたまぞう
渡邊珠藏さんのお話から

私の青年期は、ちょうど昭和二十年（一九四五年）頃でした。戦いに明け暮れ、多くの犠牲者を出し、焼け野原になった日本の復興に駆り出された世代です。昭和二十年八月十五日を境に、日本は軍国主義から民主主義に変わりました。しかし、我々の頭の中はなかなか変わりませんでした。今まで先生から教えられた正しいこと、正しい考え方が、この日を境にして間違ったことになったのです。私たちは、その頭の切りかえがなかなかできなかった世代だっと思います。

当時、私は海軍予備学生でした。教育を受けたのは大竹海軍潜水学校というところでした。当時は一万五千人の学生がいました。学生でしたので、戦いの第一線には立っていません。しかし、当時の訓練は大変厳しく、たくさん苦しい経験をしました。

私は、昭和六年（一九三一年）に小学校に入学しました。この年に、満州事変が勃発しました。中国東北部の奉天という街の郊外で中国軍と日本軍が衝突し、戦争になったのです。

「大きくなったら軍人になってお国のために働く。」というのが、当時の子どもたちが抱いていた将来の夢でした。そのような教育が徹底されていたからです。家にはお菓子も何もありません。あるのはふかしたサツマイモです。これが唯一のおやつでした。おもちゃもありません。竹の棒がおもちやです。それを振り回しながらチャンバラをやるか、兵隊ごっこをやるのが楽しみでした。

昭和十二年（一九三七年）に当時の中学校に入学しました。その年は、日本軍と中国軍が北

○海軍予備学生 大学などの卒業生を対象にした下級士官の養成制度。

○大竹 広島市から二十キロほど離れた、山口県寄りの工業地帯。

○満州事変 昭和六年（一九三一年）から昭和八年（一九三三年）の間の日中間の武力紛争。この時、日本の関東軍が、中国東北地方（満州）を占領し満州国を建国した。

○チャンバラ 刀剣でき

りあうこと。ちゃんちゃんばらばら。

○支那事変 昭和十二年（一九三七年）から昭和二十年（一九四五年）の間、日本と中華民国との間で行われた日中戦争に対する当時の日本の呼び方。

○機関銃 引き金を引いている間、自動的に連続発射される銃。機銃。

○航空母艦 航空機を搭載し、これを発着させるための飛行甲板及び格納庫などを備えた軍艦。

京郊外で衝突しました。これが支那事変です。この頃になると、軍人の数が不足してくるようになりまし。私がいた街の人々も、どんどん戦場に送り込まれていきました。

当時の中学校は、中学校と高等学校を一緒にした五年制の学校でした。授業の中には、「教練」という科目がありました。これは、五年間で戦争に送り出せる若者を育てるための科目です。低学年は敬礼や団体行進などでしたが、現在の高校一年生に当たる中学四年生になると、実際に鉄砲を使います。学校には、常時鉄砲が二百丁、機関銃が二十丁ぐらいありました。卒業する頃には、銃の使い方、組み立て、掃除まですべてできるようになりました。生徒たちは、卒業と同時にいつでも戦争に行けるような状態になるのです。

また、鉄砲をかついで、銃剣を腰に差して、まちの中心を団体行進したりしました。みなさんが見たらきつとびっくりすると思います。しかし、それが当たり前前の時代だったのです。

昭和十七年（一九四二年）に中学校を卒業し、進学しました。前年の十二月、日本軍がハワイの真珠湾を攻撃してアメリカとの戦争が始まりました。さらに、フィリピン、シンガポールなどを占領しました。「これで絶対に負けない。」と誰もが思いました。しかし、昭和十七年六月のミッドウェー海戦で、航空母艦四隻が撃沈され、日本は大敗しました。昭和十九年（一九四四年）に

人間魚雷搭乗員は、きこの雲を見た



イメージ図

回天

○サイパン島 北マリアナ諸島の島。当時は日本の領土であった。表紙裏地図

○宮島 広島県西部、広島湾にある島。世界文化遺産の厳島神社がある。

は、サイパン島がアメリカ軍に占領され、B29爆撃機の行動範囲は日本全土に広がり、爆撃の頻度が増してきました。日本の軍事施設は壊滅状態で、ますます戦力は落ちていきました。昭和二十年（一九四五年）、海軍潜水学校での基礎訓練が終わった七月の半ば頃に隊員が一堂に集められて、回天への搭乗の意思確認が行われました。隊員のほとんどが志願しました。回天というのは、全長十五メートルもある人間魚雷です。一・五トンの爆弾を搭載して、搭乗員が一人乗り、敵の軍艦に飛び込んでいくという兵器です。一度動いてしまえば、海に沈むか、敵の船にぶつかるとしかありません。こういう非人道的な兵器を使わなければならないほど、当時の日本は追い詰められていました。私はいろいろな訓練をしながら、搭乗の時期を待っていました。大多数が二十歳前後の若者でした。

昭和二十年八月六日、この日は、夏の青空が広がった天気の良い日でした。朝六時頃、警戒警報が出されました。警戒警報というのは「敵の飛行機が来るので用心しなさい。」という意味のもので、しかし、八時になると警戒警報は解除になりました。安心して、我々が朝礼をしていると、ピカッと閃光が走り、猛烈な爆音とともに兵舎が揺れました。これは何かがあったと思ひ振り向くと、宮島という島の方から爆炎が空高く舞い上がっていました。それが見る見るうちに、きのこ雲に変わっていったのです。



イメージ図

きのこ雲を見る渡邊さん

○ポツダム宣言 昭和二十年（一九四五年）七月二十六日、ドイツのポツダムにおいてアメリカ合衆国・中華民国・イギリス（後にソ連が参加）が日本に対して発した、戦争終結、日本の降伏条件などを定めた共同宣言。

宮島には陸軍の弾薬庫があり、「弾薬庫が爆発したのではないか。」と思いましたが、広島からトラックに乗せられて続々と病院に運ばれてくる負傷者を見ると、もっと大変なことが起きたのだとすぐに分かりました。時間が経過すると、広島が重大な被害を被り、壊滅状態だということが人づてに伝わってきました。その後、隊長から「八月六日の午前八時十八分頃、敵の大型機一機ないし二機が、広島上空に飛来し、一発ないし二発の新型爆弾を投下した。このため、広島市は全滅し、死者およそ十七万人の損害を受けた。」という発表がありました。

昭和二十年八月十五日の朝、朝礼のときに教官から「本日の正午より玉音放送、天皇陛下の放送があるので、本校に集合せよ。」という通知がありました。放送は、音声が悪くてほとんど聞き取れませんでした。きっと天皇陛下からの、最後の一兵まで戦い抜くのだという檄であろうとみんなで話し合っていました。実際は「日本はポツダム宣言、降伏文書を受諾したので、速やかに戦争を終結する。」というものでした。戦争に負けたという悔しさ、死に損なったという悔しさ、これでやっと戦争が終わったという安堵感、すべてが微妙に交錯して、複雑な気持ちになったことを覚えています。

太平洋戦争が終わって六十五年以上になります。その間、日本は平和で、目覚ましい経済発展をしてきました。間もなく、皆さんがこの日本を背負って立つ日が近いです。皆さんの手で、これからの日本を守っていつてもらいたいというのが私の願いです。

DATA

平成22年度北区平和事業

聴き取り

- ・平成22年11月6日
- ・屯田西小学校



渡邊珠藏(わたなべ・たまぞう)さん

- ・大正13年(1924年)生まれ
- ・札幌市北区在住